

<<口頭発表>> (3月16日 10:30-11:00)

【1C403】

日本語左方転位構文の再検討
—コミュニケーション上の働きに注目して—

居關 友里子, 大江 元貴, 鈴木 彩香

本研究は日本語の左方転移構文の性格について、コミュニケーション運営上の働きに着目し性質の異なる四種類のコーパスを用いて分析を行った。出現する談話文脈の観察から、左方転位構文はA. 状況の大局的組み立てに動機づけられた用法、B. 局所的状況への対応に動機づけられた用法の二つに大別されることが見出された。さらにコーパス別出現頻度からは、各用法とも書きことばコーパスおよび独話の性質を持つコーパスに頻出する一方で、対話がベースとなるコーパスにはほとんど出現しないことが明らかとなった。これらの観察を踏まえると左方転位構文の本質的な特徴とは、先行研究が指摘してきた「話しことば性」ではなく、「語りを披露する」文脈を想起させること、それによって話し手がこの局面において独占的に話し、聞き手はそこに能動的に介入せず受容するというやり取りへの関わり方を指定するという性質にあるといえる。

<<口頭発表>> (3月16日 11:05-11:35)

【1C403】

英語による議論においてどのような要因が日本人の自発的発言を促進するのか

春木 茂宏

本研究の目的は、英語で議論する際に日本人がより自発的に発言するようになる要因を実際のデータから見つけ出すことである。ここでは、(1)メタ議論的理解が十分であること、(2)日本人の意見表明後の他者の反応が受容的で肯定的であること、(3)自己紹介以外のやりとりが行われ人間関係の構築がある程度進んだ状況であることの3つが取り上げられる。さらにこれを通して、議論能力を育成する指導法に関する示唆も行う。

上記の3点から考察すると、日本人が議論で自発的に発言ができるのは「協調的・共創的」な状況を作り出す時であると言える。その状況では、自らの意見が何らかの貢献をしていることが確認でき発言への自信につながると考えられる。したがって、日本人の議論能力育成に向けては、協調的・共創的状況で議論をする経験を繰り返し積み重ねる段階が必要があると言える。

<<口頭発表>> (3月16日 11:40-12:10)

【1C403】

映像作品（映画）の日本語は字幕翻訳によって何が変わるのか
—日本語のセリフと英語字幕翻訳のテキストマイニング—

保坂 敏子, 豊田 哲也, 島田 めぐみ

本研究の目的は、日本語から英語に字幕翻訳されたアニメ映画と実写映画に焦点を当て、起点テキストの日本語と目標テキストの英語の字幕翻訳を対象にテキストマイニングを軸とする比較分析を行い、翻訳で何が変容するかを明らかにすることである。分析の対象は、アニメ映画『君の名は。』（新海誠監督 2016）と実写映画『そして父になる』（是枝裕和監督 2013）である。各映画の日本語セリフと英語翻訳のテキストについてテキストマイニングを行い、「語彙の出現頻度分析」とセリフ中の単語頻度を用いた「登場人物の類似度のクラスタ分析」を行った。分析の結果、日本語の呼称のバリエーションが英語では人称代名詞に置き換わり、言葉の使い分けで人間関係や心理状況を示す側面が失われることが分かった。日本語では強い個性を持つ登場人物が平板化かされることも分かった。これらは、英語字幕利用の注意点を示したものであり、言語教育に資すると思われる。

<<口頭発表>> (3月16日 10:30-11:00)

【1C406】

「へー」と連鎖の展開のかかわりについて
—第三の位置に用いられる「へー」を中心に—

関 玲

本研究では、「質問－応答」連鎖の後の第三の位置に用いられる「へー」に焦点を当て、「へー」の相互行為上での働きを明らかにすることを目的とする。また、本研究では「へー」が産出された後に連鎖がどのように展開されていくかに着目し、会話分析を用いて分析を行う。第三の位置に「へー」が用いられる場合、基本的な働きとしては応答が「へー」の産出者にとって何か想定外の情報を含むものであり、それを受け止めることにより、「へー」の産出者は自分の認識がある側面において更新されたことを示している。しかし、「へー」によって認識の差が埋められたことが示された後、連鎖は必ずしも従来よく指摘される「収束される」とは限らず、何らかの理由で展開されていく事例もみられる。本研究では、先行する「質問－応答」連鎖の性質や「へー」の産出の仕方が、どのように「へー」によって開始される第三部分以降の展開を導いているのかを詳細に分析する。

<<口頭発表>> (3月16日 11:05-11:35)

【1C406】

スポーツ実況で解説を求めること
—「指名質問」とそれに対する応答—

劉 礫岩

実況場面において、アナウンサーはしばしば解説者から意見を引き出す必要に迫られる。その一方で、解説者は競技の専門家として志向されているが、刻一刻変化する状況に対して、常に確たる見解を持っているとは限らない。本研究は、アナウンサーがどのように解説者から意見を引き出すかについて、相互行為的な視点から分析を行う。

<<口頭発表>> (3月16日 11:40-12:10)

【1C406】

日本語の会話に見られる認識的スタンスの調整

中馬 隼人

本研究は、相互行為において表示される話者の認識的スタンス (Heritage 2012) が、聞き手の応答によって調整されるデータを観察し、そのプラクティスがどのような相互行為上の課題を解決するために用いられるかを、会話分析の手法を用いて明らかにするものである。たとえば、「っけ」を伴う発話 (Hayashi 2012) を用いて、話し手にとって今は確信度が低い事柄について思い出すことを、聞き手に手助けしてもらうために確認要求を行う。それに対して、聞き手がその事柄についての知識が無いため確認付与できない応答を、問題がないものとして扱うために、認識的スタンスの調整が行われるデータ等が観察できる。このような事例を観察・分析することにより、Drew (2018) で提示されている認識的スタンスの調整 (epistemic amendments) についての理解を深めることに貢献できると考えられる。

<<口頭発表>> (3月16日 10:30-11:00)

【1 C 3 0 6】

言語使用面から見た日源新詞の受容
— 一定着度調査を中心として —

張 曉娜

1978年の中国の改革開放政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は日源新詞と呼ばれている。本発表は発表者が集めた日源新詞の定着度を質問紙調査で確認することを主な目的とする。この調査を通して、日源新詞の定着度を言語使用者の社会的属性との関わりから確認し、受容されやすい/受容されにくい語の性質などを把握する。

調査の結果、45語の日源新詞はある程度認知されているが、知名度の低い語がまだ数多く存在し、これから定着に至るかどうかは不明であることがわかった。次に、語彙の定着度には、回答者の地域差、年齢差が影響することがわかった。つまり、住む都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を受容している。そして、デジタル時代から輸入されてきた日源新詞は、限られた分野、そして特定の集団に集中的に使われる傾向が見られることなどがわかった。

<<口頭発表>> (3月16日 11:05-11:35)

【1C306】

ブラジル移民のコイネー形成
—創始者効果と方言接触理論の検証—

松本 和子, フェイジョー フラビア, 奥村 晶子, フォンセカ マルコ

本研究では、祖国を離れ新天地で変容を遂げるディアスポラ言語変種の変化の過程と結果を理解するためには、移民の出身地と方言の特定、その数・割合、および新天地で競合する言語との接触度合い等を分析することが重要であることを主張する。本発表では、在日ブラジル人コミュニティにおいて、ブラジルよりもたらされたポルトガル語の諸方言間の接触、および日本語との接触を経てどのような新方言が形成されるかを解明するため、子音 (r) の変異と変化に着目するとともに、「創始者効果」と「方言接触理論」のポルトガル語への応用性を検証する。一世の出身地・方言背景および二世の単語の読み上げデータの分析から、全体としては一世の大多数の出身地で使われている方言的特徴が二世の方言形成に大きく寄与していることが示唆されたが、そのまま踏襲されるわけではなく、平準化、再割当、中間方言化のプロセスを経てコイネーが形成されていることを示す。

<<口頭発表>> (3月16日 11:40-12:10)

【1C306】

鶴岡共通語化調査における「方言化」
—個人追跡データの分析から—

鏈水 兼貴

本研究は、国立国語研究所による山形県鶴岡市の共通語化調査のデータから、同一個人を追跡したパネルサンプルのデータを用いて、個人の変化を分析したものである。

音声・音韻項目31項目の年代別集計結果から、第1回(1950年)→第2回(1971年)では共通語使用率が増加したが、第2回→第3回(1991年)では減少したことがわかった。

そこでパネルデータの個人ごとの回答について、「共通語化」「方言化」「変化なし」に分類して集計したところ、第2→3回では共通語化した人は17%にとどまり、方言化した人が31%と大きく上回った。性別では男性、年代別では1940年代以前の生まれ、年齢別では若いときに共通語使用率が高い人に、方言化が多かった。つづいて、音声項目別の集計を行った。方言使用率の高い「中舌音」が最も方言化し、「イとエ」「鼻音性」が続いた。

以上から、共通語使用率の高い人が、方言使用率の高い項目において「方言化」することが予想される。

<<口頭発表>> (3月17日 14:00-14:30)

【1C403】

日本語母語話者と日本語非母語話者のキャラクタ表出の比較
—スピーチスタイルに着目した談話分析による質的研究—

荒井 美咲

本研究では、NSとNNSのスピーチスタイルによるキャラクタの表出を談話分析によって観察・比較対照した。その結果、NSはNNSと比べて、使用したスピーチスタイルも発動したキャラクタも多様であるが、NNSはキャラクタに関する知識やそれを操る能力を持っていないため、「ですます調」を多用する傾向があり、スピーチスタイルによるキャラクタの表出や使い分けができないことが分かった。また、NNSのスピーチスタイルのレパートリーはNSとの接触経験によって増加しうるが、意図的に生成できるキャラクタの種類とその形成能力は向上しないことが分かった。話しことば／書きことばやフォーマル／インフォーマルなどの使用場面による区別だけではなく、キャラクタとスピーチスタイルの結びつきを理解して、キャラクタを使い分けるためにスピーチスタイルを駆使する技法を、今後の日本語教育に教授項目として取り入れる必要があるだろう。

<<口頭発表>> (3月17日 14:35-15:05)

【1C403】

トウルミンモデルを用いた新聞社説の日英比較
—議論の順序と複雑度の観点から—

SPREADBURY Ash

本研究では、トウルミンの議論モデルを用いて、新聞社説における議論の組み立て方の日英差を、「〈主張〉と〈根拠〉の順序」と「議論の複雑度」の観点から分析した。その結果として次の3点が明らかになった。①〈主張〉と〈根拠〉の順番は日英で傾向が著しく異なる。②〈根拠〉の論理的機能を示す明示的なメーカー（「だから」など）は英語の方が多い。③論理的構成要素の数でみる議論の複雑度に有意差はない。

慣れない論理構造が学習者の理解を妨げる外国語リテラシー。目標言語の自然なパターンに合うように、起点テキストの情報の出現順序を変えなければならない翻訳実務。今や、こうした言語間でのレトリックの差を分析した研究が貢献できる分野は多いと考えられる。

<<口頭発表>> (3月17日 15:10-15:40)

【1C403】

韓国ドラマの日本語訳から見た対称詞運用の日韓対照

金 知垠

本研究は韓国ドラマの原文版と日本語吹き替え版を比較し、対称詞における日韓の運用の相違を明らかにすることを目的とする。

分析結果、同じドラマの原文版と翻訳版であるにもかかわらず、韓国語は日本語よりも対称詞の出現数が多いこと、韓国語では人称名詞類が多用されるのに対し、日本語では人名類と職業・地位名類が多用されることが分かった。

そして、日本語ではマイナス感情を帯びやすい重ね用法はほぼ見られないが、韓国語では重ね用法が広く見られる。また、韓国語では対称詞の連体修飾で家族の内外を表す傾向が強いが、日本語では家族を表す語に対称詞が連体修飾される場合、マイナスの感情が含意されやすいことなど、対称詞の呼格的用法と代名詞的用法の各用法内にも両言語に異なる側面が見られた。

これらの結果は、韓国語母語とする日本語学習者にも有用な情報であろう。

<<口頭発表>> (3月17日 15:45-16:15)

【1C403】

「笑い」に関するオノマトペの日中対照研究

夏 逸慧

本研究は、日本語学習者が笑いに関するオノマトペをよりよく理解させられるために、『ドラえもん』（1～44巻）から取り上げた「笑い」に関するオノマトペ（日本語版：214例、中国語版：178例）を研究の対象とし、次の課題を設定した。①マンガにおける「笑い」に関するオノマトペの形態的な特徴を考察し、臨時的なオノマトペの創造力を明らかにする。②日本語が中国語に訳される時、その対応関係や子音・母音に関する音韻的特徴も含めて検討する。研究方法は、まず「笑い」に関するオノマトペの音韻パターンを分類し、形態的な特徴を考察した。次に、オノマトペを母音ごとに頻度を取り、それぞれに差がみられた。その結果、「笑い」に関する日本語のオノマトペは臨時的な形態や接頭辞の多様化によって繊細なニュアンスの違いが込められているが、中国語のオノマトペは形態的な変化が少なく、音節の組み合わせによって複雑な心理状態を伝えることを主張する。

<<口頭発表>> (3月17日 14:00-14:30)

【1C406】

自虐的な評価が抱えるジレンマ
—いかにして人は自虐し、それに応じるのか—

岸本 健太

会話の中でしばしば行われる「自虐的な評価」は、その受け手にとって、同意すれば相手を低く評価することにつながるものの、相手自身による相手自身の評価である以上、不同意もしがたいというジレンマを抱えた行為である。

会話参加者たちはこうしたジレンマをどのように解消するのか、という問いのもと、本研究では会話分析の手法を用いて、実際の会話での自虐的な評価と、その応答について分析を行った。

その結果、自虐的評価を行う側は、笑いを伴って発話することで「笑うべきもの」として理解可能にし、同意や不同意を強く求めない姿勢を示していた。対する受け手は「笑い」で応じるものの、それに加えて同じ立場の者として共感したり、共感できない際には単に情報として受け取ったり、時には笑いに留めて相手に新たな語りを求めることで、同意や不同意、評価を回避することが分かった。

本発表では、この結果について事例とともに詳しく紹介する。

<<口頭発表>> (3月17日 14:35-15:05)

【1C406】

会話中での学習の達成
—学習の達成を可能にするメタ語用的フレームに注目して—

李 址遠

本発表では、第二言語学習の研究者が何らかの相互行為を学習であると記述することそれ自体が、特定の社会文化的視点に基づくメタ語用的実践であるという認識の下、社会的視点に基づく言語学習の研究が進み得る新たな方向性を提示することを試みる。日本語学習者2人と日本語母語話者2人が行った12回の言語交換の会話を分析し、初めは「切り替える」という語を知らなかった学習者が、それをすでに知っていて、適切に使用できて当然な者になっていく様子、すなわち、「誰かが何かを学習できた」という状態が相互行為を通して創出されていく様子を、メタ語用的フレームに注目して捉えていく。これを踏まえ、本発表では、社会的視点に基づく言語学習の研究が、誰が、誰の、どのような行為を、学習である（または、学習でない）とするのか、それはどのような視点に基づくものであるのか、という問題に目を向けるべきであることを主張する。

<<口頭発表>> (3月17日 15:10-15:40)

【1C406】

笑いの相互行為性

—多人数会話における不均衡状態から笑いの共有に至るプロセス—

児島 麦穂

本研究の目的は、友人同士の多人数会話において「笑い」という要素はどのような機能を持つのか、その諸相を解明することである。本発表では、一部の会話参与者だけが笑いに参加しない（できない）ような、参与者同士に意見の不一致や知識の不均衡がある場面を取り上げ、その状態を会話参与者たちが笑いを通してどのように対処していくのかというプロセスに焦点を当てる。女性友人同士3人での多人数会話を扱い、その中の笑い発生場面を談話分析することにより、円滑な笑いと共通基盤の関係性、笑いにより交渉される参与者たちの基盤や立ち位置について考察した。その結果、会話参与者たちは笑い発生に至るまでに笑いに必要な基盤化を行い、即興的に全員が参加できる笑いを調整するという笑いの相互行為性が明らかになった。

<<口頭発表>> (3月17日 15:45-16:15)

【1C406】

外食場面における外部割り込みからの話題再開ストラテジー

小笠 拓子, 岡本 雅史

本研究では、外食場面において飲食提供などによる外部割り込みが生じた場面を対象とし、割り込まれる直前の話題を参加者がどのように再開させているのかについて分析を行った。データとして女性2人組の外食場面を3グループ撮影し、その際の外部割り込み39回に対して「話題進行度」「話題中断時間」「外部割り込みの種類」「話者移行適格場(TRP)」等の各要素に注目して分析を行った。分析の結果、①話題再開は話題進行段階とTRP位置、話題中断時間によって左右される、②新奇な注目対象の出現によって再開までの時間も変化する、③TRPが無視された時は話題再開傾向が強い傾向にある、④中断直前の話し手が中断前の続きを話すことで話題を再開させる〈自己再開〉と、中断直前の聞き手が再開後に働きかけることで話題を再開させる〈他者再開〉が見られる、といった話題再開のための参加者間での調節や協働のストラテジーが明らかとなった。

<<口頭発表>> (3月17日 14:00-14:30)

【1C306】

日本手話会話におけるろう者の言語使用
—年代別のろう者のマウジング使用頻度に着目して—

岡田 智裕, 坊農 真弓

日本手話の話者同士の会話の様子をみていくと、ひっきりなしに口元を動かしていることに気がつく。口の部分の動きは、Mouth Actionと呼ばれ、大きくマウジングとマウス・ジェスチャーの2種類に分けられる。本研究は、日本手話会話における年代別のマウジングの使用頻度を分析し、ろう者の言語使用の実態を明らかにすることを目的としている。「日本手話話し言葉コーパス」の石川県の映像データを用い、20代から80代までの20代ごとの男性それぞれ2名（ただし20代は1名）のろう者の手話会話におけるマウジングの使用頻度を分析した結果、80代から20代へと年代が低くなるにつれてマウジングの使用頻度が高まっていくことがわかった。

本研究の結論では、教育のレベルが上がれば上がるほどマウジングの使用頻度が高まっていくという可能性について議論する。

<<口頭発表>> (3月17日 14:35-15:05)

【1 C 3 0 6】

福祉事業所の契約書類等における知的障害者向けの言語的配慮
—計量分析および語の言い換え事例を中心とした考察—

羽山 慎亮, 打浪 文子

本発表は、福祉事業所で知的障害者に宛てられた契約書類等について、その文章を分析することで、知的障害者向けの言語的配慮の現状と特徴を明らかにすることを目的とした。収集した重要事項説明書および利用契約書をルビ付きのものとルビ無しのものに分けた上で、「語種比率」「品詞比率」「1文の長さ」などの項目、および、契約書類で必ず使用される語が具体的にどのように表現されているかを調査した。

その結果、全体の数値としてはルビ付きとルビ無しで顕著な差はみられなかった。しかし、少数ながら、契約書類そのものをわかりやすく、あるいは契約書類の補助資料としてわかりやすいものを提供しようという試みがみられるものがあつた。これらの文章では、語種の変換や構文の工夫、あるいは平易な類義語への言い換えが確認された。これらの特徴や言い換え事例を参考にしつつ、契約書類の「わかりやすい版のフォーマット」を提案することが求められる。

<<口頭発表>> (3月17日 15:10-15:40)

【1C306】

揺れるアイデンティティ
—日本在住日系人へのインタビューナラティブの談話分析—

村田 和代

本発表では、南米出身で日本在住の日系3世・4世の若者3名（20代2名，30代1名）へのインタビューナラティブ（移住や現在の暮らしについての自由な語り）の談話分析を通して、彼らが何者であるか（アイデンティティ）については、アイデンティティ構築が語りの中でどのように立ち現れるかを考察する。アイデンティティについては、談話の中で動的・相互行為的に構築され、話者の語りにあられる他者との関係性に基づいた話者の「立ち位置」としてとらえる（Marra and Angouri 2011）。インタビューナラティブの談話分析の結果、日系3世・4世の若者たちは、複数のアイデンティティ（例：日本人，ブラジル人，外国人）に立ち向かい悩んできたことが明らかである。そして、これら複数のアイデンティティは、インタビュー本人の意識というよりは、彼らの周りの人たちによってラベル付けされていることもわかった。